ボランティア活動を通じた他者理解の深まり：福岡市主婦卓球愛好会における障がい者スポーツへの関与から

溝内，亮佑
九州大学大学院人間環境学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7172579>

出版情報：社会教育研究紀要. 5, pp.37-41, 2024-02-29. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

ボランティア活動を通じた他者理解の深まり

—福岡市主婦卓球愛好会における障がい者スポーツへの関与から—

Process of Understanding Others through Volunteer Activities

— Involvement in Para-Sports by Table Tennis Association of Housewives in Fukuoka City —

溝内 亮 佑^{*}
Mizouchi Ryousuke

1. ボランティア活動と他者理解

本論では、福岡市主婦卓球愛好会（以下、愛好会）の会員にとっての日常的な学びの内実を論じるために、愛好会とボランティア活動の関係に注目する。

田中理恵子さん（愛好会元会長）によれば、1997年からスペシャルオリンピックス日本（知的障がい者と共に行うスポーツ大会）の福岡支部の立ち上げに会員有志で関わったことを契機に、愛好会では有志でボランティア活動が続けてきた¹⁾。

田中さんが偶然、スペシャルオリンピックス福岡のイベントに参加したときに声をかけられ、卓球プログラム立ち上げを引き受けたことがボランティア活動により精神的に向き合う端緒ではあった。しかし、人と人との関わりを大事にし、その中で仲間の輪を広げていくという愛好会の理念に基きながら、愛好会におけるボランティア活動は、意図的な社会貢献活動というよりは「当たり前」のものとして取り組まれてきたという²⁾。

このように愛好会においては「当たり前のもの」と位置付けられてきたボランティア活動であるが、本論は社会教育の視座から、それが他者理解の深まりという学びの一環にあったと仮定し、検討してみたい。

愛好会とボランティア活動に関する先行研究として、伊藤恵造（2002）は愛好会のボランティア活動を、「教育委員会などからの後援や補助金などに対する責務を果たし、社会的な評価を受けることとなった」一要因として組織論的な視点から評価を行った³⁾。また相戸晴子（2003）は愛好会における学習の深まりとしてボランティア活動に触れているものの、それは芝の会の位置づけを説明する上での補足的な位置づけに過ぎないように見える。

近年の社会教育学研究を参照すれば、ボランティアと学びの関係は特に個人と社会の関わり方の変容から論じられてきた。田中雅文（2011）は自己と社会の関係を「相互に影響を及ぼしながら進行する過程（自己と社会の再帰的変容）を媒介するもの」として公共空間の存在を上げた上で、自己・社会・公共空間の結節点としてボランティアに関わる組織・活動を分析した⁴⁾。その後の研究では、石野由香里（2021）が「他者をなぞるように演じる」演劇教育の手法とその意義について論じながらも、ボランティア活動に関わる学生たちが徐々に地域コミュニティで活動を展開するに至った過程を描いていることが示唆的である。そこでは地域コミュニティでの活動を通して自分の既存の認識枠組みからは理解が困難な他者と出会

^{*}九州大学大学院人間環境学府博士後期課程

い「ひっかかり」を覚える学生たちが、他者を「なぞる」ことで徐々に日常生活の自己認識を変容させていく過程が描かれている⁵⁾。

ここでは他の多くの先行研究を扱う紙幅は無いものの、冒頭の田中さんの言と先行研究を折衷させる形で、愛好会におけるボランティア活動を「他者理解」につながる学びとして把握したい。

2. ボランティア活動の定義・研究方法

まず本論におけるボランティア活動の定義を簡潔に示す。

ボランティアという概念自体が日本で一般的に普及したのは阪神淡路大震災以降の1990年代後半からである。愛好会の場合は、自分たちの間で卓球に取り組むことから卓球や他のスポーツ大会の運営や補助へと活動が広がっていった経緯が存在する。本論ではそれらをボランティア活動として幅広く捉える⁶⁾。そのうえで2000年代以降の愛好会におけるボランティア活動史を中心に、それらが他者理解に関わる学びに繋がる可能性について検討したい。

研究方法として、まずボランティア活動の沿革を整理するために、愛好会で年に1回発行されている会報の中から、ボランティア活動にかかわると思われる言及を全般的に整理し、中でも障がい者スポーツに関するものに注目した。

そのうえで愛好会にボランティア活動を率先して位置付けた人物として、前会長の田中理恵子さん、その方向性を受け継ぎボランティア層の広がりにも寄与したと思われる現会長の橋本さん、卓球未経験からサークル・愛好会に参加し、ボランティアや指導者への活動へと広げてきた野田さんにインタビュー調査を実施した。この三者にインタビュー調査を行うことで、愛好会におけるボランティア活動がどのような問題意識のもと取り組まれてきたのか理解することができると考えた。以下、順に氏名、インタビュー実施日、役職・活動等を挙げる。

田中理恵子さん【2023/03/03インタビュー 愛好会5代目会長】

橋本太貴子さん【2023/03/10インタビュー 同6代目会長】

野田京子さん【2023/06/17インタビュー 役員経験・ボランティア活動に積極的に関与】

3. 愛好会とボランティア活動のかかわり

ボランティアと呼称される活動の中には一般的には行政が提示したボランティアの枠組みを受託する形式のものも少なくないが、愛好会では「自発的」なボランティア活動の在り方を模索してきた。

ボランティアという単語が愛好会、少なくとも会報の中で使用されたのは1990年度のシティマラソンへの市民ボランティアとしての参加（関係団体として招集）が初である。その後、前述のスペシャルオリンピックスの一つのきっかけに、様々なボランティア活動が展開していく。他方で、当時はボランティアと呼称していなかったものの、1976年から始まった「母と子の一日卓球」は「母と子のふれあいの場所として、又、子どもの卓球に対するきっかけ作り」を行うための試合として始まった。また、スペシャルオリンピックス以前にも公民館での配食運動に関わる中で、誰かの役に立つという経験を重ねてきた会員もいた。仲間づくりという観点においては、「母と子の一日卓球」や配食運動は愛好会におけるボランティア活動の出発点といえよう。

関連して、1985年度の「婦人スポーツ活動交流会（福岡市教育委員会の主催）」でのスポーツ団体間の交流や、1988年度の「福岡市婦人スポーツ活動団体連絡協議会（前身は婦人スポーツ活動交流会）」の発足など、スポーツ団体・婦人団体同士の各団体の枠を超えた交流の体制づくりが、1990年代以降のボラン

ティア活動の土台となったと考えられる。その後、1996年のスペシャルオリンピックスへの参加以降、障がい者スポーツに対する運営や審判を通じた継続的な関与が行われてきた。

橋本さんが会長に就任してからの近年動向を見ても仲間づくりという理念は貫かれてきているようである。橋本さんは会長として、ボランティアの活動について愛好会会報で積極的に発信することを意識してきた。ボランティア活動の発信は愛好会会員を増やす為に行っているわけではなく、会員たちのたくさんの活動の中の一つとして会報で紹介・報告をしてきた。しかし結果的に、そうしたボランティア活動の蓄積は会員同士のみならず、地域の中にも仲間を増やすことにも寄与しつつあるようである。

ボランティア活動の背景には「自分たちだけが楽しめればそれで良いということではなく、ボランティア活動などを通して地域で仲間づくりをしている団体」という愛好会という組織に対する認識があったという。「社会教育団体とはどういうものなのか」日々迷いながら学び続けながらも、周囲の人々から評価を受けることで、自分たちの活動が社会教育の一環として行われているという確信を持ちつつある。その一つの例として、サークルに出てこれない人が、少しでも活動に参加するにはどうしたら良いのか意見を申し合ったり、サークルの問題点や課題をみんなで話し合い、工夫をしたりしていることを芝の会で話した際、講師（社会教育学の専門家）から「そういった活動そのものが社会教育ではないかと」言われたことを挙げていた⁷⁾。

このように、ボランティア活動は障がい者スポーツへ関わったことこそ偶然ではあるが、「いつでもどこでも誰でも卓球を楽しむ権利を」という愛好会の理念を体現するものとして、ある種必然性を伴って取り組まれてきたとあっていいだろう。その結果、愛好会内外に仲間を増やすこととそれを通して充足感を得ることの好循環が生まれているようである。

4. ボランティア活動として障がい者スポーツに取り組んだ意味

ここでは障がい者スポーツに対してボランティア活動として取り組むことの意義について触れたい。

例えば、スペシャルオリンピックスでは卓球だけでなく27種目もの競技が行われるが、知的障がい者にかかわるための学び（アスリート理解）やコーチとしての規律（知的障害へのリスペクトその他）など「人としてどうあるべきか（田中さん）」に関わる学びが同時に存在する。そうした学びは他のボランティア活動にも転用可能なものであるという。スペシャルオリンピックスの学びは、後に脳血管障がいの人たちのプログラムでのボランティアに拡がっており（2023年現在で20年目）多様な障がいについて学ぶ機会として位置づいている。また、知的障がいの人々にとっての卓球大会が少ないことに問題意識を持ち、「発表会の場を作ってあげたいと障がい者スポーツ協会へ声をかけ、障がい者スポーツセンターを利用して、初心者でも誰でも参加し楽しめる愛好会方式で」参加できる大会の企画・運営を精力的に行ってきた。そのあゆみは「私たちが必要としてくれる人たちへのサポートが、ボランティアとしての生きがいにつながっている（田中さん）」という言葉に表象されるように、愛好会の日常的な活動や理念の延長線にあるといえる。

野田さんは橋本会長時代に役員として活動する中で勧めを受け、ボランティア活動をスタートさせた会員の一人である。会報に掲載されている情報からスペシャルオリンピックス自体は知っていたが、障がい者の卓球ということで自分から積極的にやりたいと声を発したわけではなかった。しかしある時「ボランティアをしてみませんか」と橋本さんから声をかけられたことで活動を始めた。そのため当初はスペシャルオリンピックスの理念に深く精通している訳ではなかった。また、障がい者と接した経験については野田さんご自身の周りに自閉症の子どもがいたものの、それ以外の交流の経験はなかった。そのような意味で野田さんはゼロから障がい者スポーツに対する学びを始めた会員の一人であったといえる。

しかし現在では、障がい者スポーツの指導員の資格を取得するなど、障がいがある人々と卓球の場を共にすべく学びと実践を積み重ねてきた。野田さんは現在、スペシャルオリンピックスプログラムに参加している。野田さんは、競技者のパーソナリティを把握し、卓球を楽しむような接し方が知的障害者スポーツには必要になるのだと話す。

技術指導っていても、そこまで特別にこの子だけをうまくするっていう風にはできないので、あの子達だけ違う練習してるみたいなのは、不公平って素直に思っちゃう子が多いんですよね。とにかく楽しくする、楽しい場所にしよう、って田中さんがいつもいわれるので、今日楽しかった、来て良かったと思って帰ってもらえるようなプログラムと一緒にやってるので。いくら技術を教えてもらっても、つまらなかったって、ふてくされて帰られるようじゃだめだと思う⁸⁾。

このように、障がいを持つ人々を競技者として如何に理解するのが肝要であり、野田さんは日々の活動あるいは学習会を通して学びを積み重ねてきた。

では、こうしたボランティア経験は愛好会会員としての野田さんにとってどのような意味を持ってきたのだろうか。野田さんは愛好会入会当時を「自分が楽しくて、自分が卓球をしたくて入った感じだった」と振り返る。

来ることが楽しくて、私は勉強になるとか、ここで私はすごく満足するみたいなこと言われて、それはちょっと理解できなかったんですけど、今は分かります。ここに来ると私は楽しいっていう人がいるんですよ。なんか結構年配上の人で、70代とかボランティアのベテランさんが。そういう感覚が最初分からなかったんですね。教えてあげるっていう上からの目線で見てたかもしれない⁹⁾。

そのような中で、スペシャルオリンピックスに関わるようになって「周りを見る目が優しくなった」と感じるのだという。

愛好会には30代ぐらいで入ったので。まだ自分がやりたいやりたいで、子育てしながら息抜きに卓球を始めたぐらいだったんですけど。(中略)やっぱり障がい者を見る目がやさしくなったっていうか、普通の生活してても、歩いててもつえを持ってる人も全然スーッと素通りしてたのが、大丈夫かなとか、なんかそういう目で見れるようになりますね¹⁰⁾。

そして、こうした他者に対するまなざしの変化は、障がい者に対するものだけでなく、卓球を共にプレイする仲間との関係でもおこっているようである。

うちのサークルも今86歳の人が入って。介護もちょっと認知も入りながら卓球してる人がいるんですけど、やっぱりそういう人たちに対する目も、自然と障がい者に対する感じとほぼ同じですよ。自分の生活だけだったら、そこまで無いのに、ちょっと手をかけたり、優しくゆっくりだったりそうなります¹¹⁾。

このように、野田さんにとってボランティア活動とは、ボランティア活動を通して出会う人々に対する理解だけでなく、日常生活や愛好会活動における他者理解につながっているようである。

5. 分析：ボランティア活動と愛好会活動の接点

ここまで愛好会におけるボランティア活動の展開と会員の学びの内実について見てきたが、最後に、ボランティア活動が愛好会活動にもたらす意味について、障がい者スポーツを軸に今一度整理を行いたい。

愛好会ではスペシャルオリピックスを契機に知的障がい者から、肢体不自由者を含めた多様な障がいに関わるものへとボランティア活動の枠が広がっていった。社会的にはボランティアという概念自体、一般的とは言えなかった当時から卓球以外の活動にも手を広げていたことは先駆的な取り組みであったといえる。

一方で、ボランティア活動の基盤には「全ての人が卓球を楽しむ」という理念があったことが各さんへのインタビューから見て取れる。その意味で、ボランティアへの関与は日常の愛好会活動の延長線として自然発生的に始まったと同時に、それが続けられてきたことは必然的とさえいえるだろう。

さらに、ボランティア活動の経験は愛好会活動においても、その理念と活動を結びつける一助となっていることを最後に確認したい。愛好会の理念を示した八ヶ条のひとつに「楽しむためのスポーツがみんなのものになる」という表現がみられる¹²⁾。障がい者スポーツへの関与が日常の延長線であった反面、愛好会活動にたいしては自身の他者認識を問い直す契機であったことが伺える。野田さんは「教えてあげるという上からの目線」や愛好会の仲間に対するまなざしの変化を振り返った。こうしたことを踏まえると、ボランティア活動は愛好会の理念に根差したものであると同時に、それを愛好会の中で実質化していくことに寄与していると考えられる。

【注】

- 1) 田中理恵子「公民館サークル活動と公民館：福岡市主婦卓球愛好会の活動を通して」『月刊社会教育』第44巻6号、p13-20、国土社、2000。
- 2) 伊藤恵造「地域スポーツ組織発展の「鍵」に関する研究：福岡市主婦卓球愛好会の事例」『日本体育大学紀要』第32巻2号、p104、2002。
- 3) 相戸晴子「福岡市公民館における『主婦卓球愛好会』のサークル学習活動史」『社会教育思想研究』p109-123、2003。
- 4) 田中雅文『ボランティア活動とおとなの学び：自己と社会の循環的発展』学文社、2011。
- 5) 石野由香里『他者の発見：演劇教育から人類学、ボランティアと地域活性論への架け橋』早稲田大学出版部、2021。
- 6) 本論ではボランティア活動を実体論的に定義するのではなく、特定の活動をボランティア活動として位置付けてきた愛好会自体の実態に迫るという立場をとるため、以下の文献を参照した。
仁平典平『『ボランティア』とは誰か：参加に関する市民社会論的前提の再検討』『ソシオロジ』48号、p93-109、2003。
- 7) 橋本太貴子さんへのインタビュー（2023年3月10日）
- 8) 同上
- 9) 同上
- 10) 同上
- 11) 同上
- 12) 前田恒子「会員研修会：いま愛好会をふりかえる：20周年講演から」愛好会会報19号、1991。